生活者としての高齢者

Aged People as Consumers

近藤 和子

生活研究コーディネータ

Kazuko Kondoh

Coordinator of Daily Life Reserch

I. 高齢者の身体的特性

我が国の65歳以上の人は、既に全人口の14%を超え、2020年には25%に達すると推定されている。

高齢者の中には他人の手を借りないと生活ができない人もいるが、9割近い人は健常そうに暮らしている。65歳を過ぎると、元気とはいえ40歳代に比べると視覚が変化してくることや、手足の筋力が劣ってくることは周知のようである。アメリカでは65歳以上74歳までをヤングオールドといい、75歳から84歳までをオールドオールドといい85歳以上はスーパーオールド分けているが、我が国にもあてはまるようである。

商品科学研究所の行った、521名の自立して暮らしている高齢者の身体機能の調査結果からは75歳以上になると、平均的にはかなりの低下がみられたが、個人による差も大きいし男女差もかなりあることが分かった。その調査から日常生活で困難や不具合を生ずる原因となる高齢者の身体的動作の特性について次ぎのような傾向がみられ、幾つかの今まで気づかなかったことも見いだされたのだった。

- ・握力や指先力は男性の方が優れていて、何時も女性は男性の6割位の力しか無く、65歳の男性では40歳の女性より優れていた。

- ・肩関節は女性のほうがよく動くが男性はかたく、背中に手を回すのが難しい人が多かった。

- ・上肢挙上角は真上に手を伸ばせない人が、75歳以上になると男性の3.6割、女性の5.7割もみられた。

- ・下肢挙上高は男女差は少なく、65歳以上の全体では平均して45センチメートルは足をあげることができたが、2割近い人はその高さまで上がらなかった。

- ・開眼片足立バランス力は加齢により徐々に低下するが75歳以上になると低下が目だった。

- ・聴力は75歳以上の高齢者の4割もが自分自身で低下を自覚していた。眼鏡をかけていても電話帳や細かい文字が見えないという人が現れるのも、この年齢からであった。

II 高齢者の安全の問題

上記のように高齢になるほど、身体的な変化が見られ、日常生活でかなりの困難が生じてくることが予測されよう。バランス力や筋力の低下は少しの段差でも転び易く、廊下や浴室で滑り、転ばないまでも恐い思いをしたという人がかなりいた。我が国の事故の原因をみても、高齢者が平面上での転倒事故の8.5割をしめている。浴槽での事故死はその全体の7.2割、階段などからの転落事故死者の6.2割

を占めている。

そのほか、高齢者の家庭内でのさまざまなトラブルも多く発生している。商品についてはPL法もあるのでモノ側に起因する事故は無いとしても、注意の不足や忘れっぽくなっていたり、手足の筋力や指先の巧緻性の低下が、さまざまな事故につながっているといえよう。

最近ではバリアフリーという言葉を目にする機会が多いが、高齢者のますます増える社会では、すべての商品も施設も不安無く誰にも使えるような、配慮あるモノづくりが求められている。

バリアフリーを安全面から配慮したモノの例を挙げてみよう。東京ガスが開発した「セイフル」というガスこんろは焦げつき防止などのほか、火が立ち消えしても検知しガスの不要な発生を停止させる仕組みをもうけている。これは高齢者のみでなく忙しい仕事を持つ女性からも喜ばれている。なお家電品全般にたいしても、高齢者は「異常時に自動的に停止するなどの安全であること」を第一に望んでいて40歳代と最も差が大きいことが、日本電機工業会の調査で明らかにされている。

高齢社会における安全な生活の問題は家庭内で使用するモノのみに限らず、住居、公共機関の施設、設備のすべてに関わることで、今後の社会全体が対応しなければならぬ。

III 高齢生活者の快適性

1. 一般用品の使いやすさについて

加齢による身体の機能の低下は、やがて重いモノが持たなくなり、高いところに手が届かなくなる、浴槽の縁の高すぎるのや、階段の上がり下りが苦痛になる。女性では握力や指先の力が落ちて、開封や開栓が大変になる。なお視力の衰えは、手仕事や読書を困難にさせる。このようなバリアを無くすことができれば、高齢者の生活はどんなに快適になることであろう。できれば、特別でなく誰もが共用できるモノを使用できるのがよい。高齢社会においては高齢者を他の消費者と差別するような扱いをされ易いが、そのことを快く思っていない。

では普通に暮らしている高齢者が困難に感じないで、快適使えるモノとはどのような条件が満たされたらよいのだろう。まず第一は、身体寸法や手足の機能に合っていることである。第二は家電品などの操作性は多機能の複雑なものより単純がよい。第三は説明や表示の文字は見えやすく、分かりやすいことが肝要である。第四は日常の習慣と大き

く変わり過ぎない使い勝手の方が受け入れやすい。

今までは作り手自身、即ち、男性に使いやすいモノが多く作られていたといえよう。高齢社会を目前にした、これからは各企業のすべての商品の見直しが必要である。もし設計が変えられないとすれば、必要にあわせ補助具を使えるようにしたらい。

2. 補助用品と高齢者専用品

欧米の長寿先進国では、各種の補助具が見られるが、我が国ではまだまだ少ない。一般用品のバリアフリー化が難しい場合は補助具が使えると良いだろう。

次には高齢者専用品である。高齢になると、使わないと生活が難しいと言うようなモノがある。めがね、杖、靴、義歯、背のまるい人にも合う服、下着などもある。これらは使い手に合わせて調整の必要があるので、調整に時間がかかるし費用も高くなりやすい。なお、高齢者向け商品というデザインがよくないのが多く不満は大きい。実は、高齢になってもおしゃれ心はかなり高いのである。高齢者がいきいきと暮らせることは、社会全体を明るくすると誰も考えるが、障害があってもそれを克服するのに役立つモノはまだ十分でない。それらを求める人は、今後ますます増えるにちがいない。例えば脚立を使えなくなったら台所のつり戸棚にしまった品は取り出せなくなるだろう。あるメーカーは棚部分が電動で目の高さまで下がってくる品を開発した。瓶の蓋が開けにくい人には、開封が楽にできるゴム製のグリップが手元にあると助かる。

中年になると具合のよい服や下着、靴がなかなか見つからないということが、しばしば話題になる。若い頃と変わった身体の形状、寸法、デザインが合わない場合が多くなる。消費者としてこれから大きなシェアを占める人たちに、メーカーの対応が必要に迫られてるといえる。洋服の生活を長くしてきた、これからの高齢者は今までとは異なるニーズがあるだろう。下着の選び方もちがうし、おしゃれのセンスもよい。これからの中高年者を今までの老人として取り扱わぬよう、メーカーは人々の時代による変化をも十分とらえる事も大事になっているのである。

IV 消費者トラブルと高齢者

21世紀を目前にし高齢社会は介護を必要とする人たちが多くなる社会と思われているが、実はそればかりではない。余暇時間と文化的素養はもつが、生活の技術の力の低い、しかし元気な高齢者の時代がくると考えられる。

経済的には経常所得が減るが、多少の貯蓄や年金で、人生をまだまだ楽しめる人も多い。それぞれの生き方やそれまでの準備の仕方で異なるが、一方に生活の技術や知識に疎いため問題を抱えている人もいる。親戚だとか親しい知人だからといって、高額な商品の保証人になり、死亡後にその借金を子が負うことになった話などもある。身近な法律や消費に関わる知識が無いと、様々な問題が起き、解決に苦労している高齢者の話は少なくない。最近では高齢者の間で訪問販売、通信販売の利用が増えているが、唯一広告や宣伝に頼る購入なので、信用できる会社かどうかなど予め調べておく慎重さがなくてはならない。前払いをしたのに商品が届かないとか、商品が広告と比べ、違っていたというトラブルがおきている。商品を受け取ってから支払うとか、返品できるかどうかを確かめて購入するなどの用心深さと、身近な法律の知識が求められよう。

V 高齢者が求める快適生活を得るために

現在は自立している人も加齢に従って、様々な身体的な故障が感じられる様になると、誰も不安になり自信が無く

なるが、友達や家族と良い関係にある人は幸せである。高齢者の中には誰とも離れて孤立してしまう人がいるが、その様な場合には問題である。新しい情報が途絶えるのみでなく、その人の様子も他の人に知られないことから、深刻な事件に発展することも少なくない。特に75歳以上の後期高齢者には周囲の注意が必要となるだろう。

我が国のように急速な高齢化、長命化は個人的にも社会的にも対応に戸惑いも多いが、行政に任せるだけでなく、元気なうちは、高齢者は自ら学び考え行動しなければならぬ。もし次のような点が、改善されるなら、かなり不安が少なくなるであろう。

1. 誰でも、どこでも、安心して外出できるバリアフリーの町づくりを。

アメリカのADA（米国の障害者法）のように、法律で基本的に国民全体のコンセンサスが得られるようにしてほしいものである。いまはバリアフリーが点でしかない。

2. 高齢者向けの自立を支援するような良い住宅の斡旋を。

高齢期になっても自立して暮らせるように、その前からの対策が大切である。自立して、健康的な生活が長く続くような支援が望まれている。

3. 補助機器センターを作り、介護だけでなく自立の援助をも。

そこにゆけば良い相談相手が居て、障害によるバリアを無くしたり、軽減させることができる、もっとも適応するモノを選んだり、購入の世話をしてくれる。また、使い手の立場になって自立を助ける工夫をしてくれる所になるとよい。現在ある我が国の福祉機器センターでは不十分である。

4. 年をとっても快適な生活ができる総合情報センターを。

いつでも親切に対応してくれる相談業務と、直ちに解決策に結びつくシステムを設けてほしい。そこでは学習、趣味、ボランティア、就業などの案内もする。さらに老年になることをふまえて、住まい、衣服、食べ物、経済、民法、病気予防の知識を求める人に応えられる方策も用意できるようにすることが好ましい。

5. 高齢者の立場を良く理解できる療法士やアドバイザーの養成を急いで。

早い自立生活を、総合的に指導のできる信頼のおける専門家の養成を急いでほしい。高齢者の誰もが望んでいることは安全、安心な将来であり、自尊心が尊重される日常生活であろう。

6. 高齢者自身も生活の質を高める努力を。

高齢者も元気なうちは、与えられるのを待つのでなく、積極的に学んだり、社会に役立つ行動をする方がよい。